

幼児の自己効力感と対人行動

柴田 利男

目次
I. 問題
II. 方法
III. 結果と考察
IV. 総合考察
引用文献

I. 問題

幼児の社会的認知に関する研究では、役割取得、対人認知、原因帰属、社会的問題解決能力、自己効力 (self-efficacy) などのさまざまな要因が検討されてきた。役割取得や対人認知、原因帰属などは、対人的状況を捉える、あるいは自分の位置を決定し、そこで対人的目標を決定するための基礎的な要因と考えることができる。これらについては主に、Dodgeとその協同研究者によって意欲的に研究が行われてきた。(Dodge, 1980 ; Dodge, McClaskey & Feldman, 1985 ; Dodge, Pettit, McClaskey & Brown, 1986)。一方、社会的問題解決能力や自己効力といった要因は、有効なスキル行動を選択し実行し、その結果を評価するといった、対人行動のプロセスそのものに関連する要因である。言い換えれば、社会的コンピテンスという概念の根幹に関わる要因である。

柴田 (1993, 1996) は社会的コンピテンス (社会的有能さ social competence) を、対人行動の効果性の観点から「様々な対人的状況において“よい結果”をもたらすための、行動

スキルの運用能力であり、状況に応じたスキル選択の適切性と実際に行われた行動の効果性から評価される」と定義し、社会的スキルや認知されたコンピテンスとは明確に区別している。認知されたコンピテンスとは、あくまでも自己評価であり現実の行動傾向や他者評価とは必ずしも一致しない。しかし自己認知のプロセスやその結果生じる評価、すなわち自己効力感は、社会的コンピテンスの重要な規定要因となる (柴田, 1998)。

Bandura (1977) の社会的学習理論によると、人間の行動は先行要因と結果要因を含む認知活動によって制御されると考えられる。先行要因のなかでとりわけ重視されるのは、行動と結果に関する期待であるとし、これは効力期待と結果期待にわけられる。人はあれこれの行動を遂行すれば、ある結果を生むであろうという期待や予期をもつが (これを結果期待という)、これとは別に自らがこのような行動を遂行できるかどうかという予期や期待 (効力期待) もまた結果期待とともに動機づけの面で大きな働きをもつという。後者のような、それぞれの個人によって認知された効力期待を自己効力 (self-efficacy) とよび、行動決定因としての重要性が指摘されている。本研究では自己効力感を、Bandura (1977) のいう自己効力 (self-efficacy) をベースに、自分に対する認知的評価の結果として形成された社会的自尊感情としてとらえた。その意味では、自己効力感とは従来、認知されたコンピテンスや受容感 (acceptance) と呼ばれ

キーワード：自己効力感，対人行動，幼児

ているものを、行動の認知的先行要因、すなわち動機づけの側面から言い換えたものとみなすことができる。

Harter (1982) は主に成人を対象に研究されてきた自己効力の問題を、児童および青年(8歳~18歳)を対象に検討した。自尊感情(self-esteem)のような人格面での自己効力とともに、学習面、運動面、社会面というようにある領域に限定された自己効力の存在を仮定し、それらを測定しようと試みた。その結果、児童および青年は、上述のような領域特長的(domain-specific)な自己効力感を持っていることが見出された。さらに Harter & Pike (1984) は、幼児および小学校低学年の児童(4歳~7歳)を対象に検討を行っている。桜井・杉原(1985)は Harter & Pike (1984)と同様の手続きを用いて、日本の幼児の有能感や受容感について検討している。その結果、幼児は小学生や中学生と比較して、比較的肯定的な判断をしていることを示唆している。それは、幼稚園では学業成績のように子どもの能力を示す客観的な指標が少ない、したがって、幼児は他の子どもと客観的に比較されることはあまりなく、また比べる能力もそれほど発達していないため、自分にどの程度の能力があるのか的確に把握することができない。それ故、自分自身が満足してれば「よくできる」、すなわち有能であるということになるだろうと指摘している。また両親・教師などの周囲の者は幼児に対してあまり高度なことは要求しない。したがって、幼児には自分の行動を否定されるような失敗経験は少なく、人間が本来もっている能動的な姿勢がゆがめられていないのではないかと指摘している。その他、Harter & Pike (1984)は幼児では「こうありたい」という理想の自己イメージと現実の自己イメージとの間の区別があまり明確ではないと指摘している。

また桜井・杉原(1985)は、Harter & Pike (1984)同様、領域特長的な有能感・受容感

について検討しているが、同時に、因子分析によって一般的な有能感因子と社会的受容感因子を見出している。このような一般的因子が抽出された理由について、幼児は自分が知的な面で有能であるとか運動の面で有能であるとかを区別せず、得意か否かという区別のみをし、また受容感においても、ただ一般的に他者から受容されているか否かを判断している、しかし、幼児は有能感と社会的受容感とは明確に区別している、と指摘している。そして、このような状態が加齢とともに分化し、児童期になると様々な領域で自分のコンピテンスや受容感を区別して判断できるようになると指摘している(桜井, 1983)。自己効力は一般的か領域特長的か、という問題に関してはさまざまな議論があり、いまだに解決されていない(近藤・石井, 1997; 竹綱・鎌原・沢崎, 1988)。

先に述べた通り、自己効力感あるいは認知されたコンピテンスは、具体的な行動の決定要因であり、社会的コンピテンスの重要な規定要因であるが、現実の行動傾向や他者評価とは必ずしも一致しないことが指摘されている。桜井・杉原(1985)は教師の幼児評定と幼児の自己評定との関係について、学習面および運動面の有能感尺度では幼児の知覚しているコンピテンスが幼児の実際の能力と関連があること、また、仲間からの受容感尺度において幼児の知覚している仲間からの受容感が教師の判断とほとんど関係のないことを指摘している。有能感について有意な相関がみられたとはいえ、相関係数、説明率ともに高くなく、自己効力感あるいは認知されたコンピテンスとコンピテンスの他者評価あるいはコンピテントな行動との関連性は明確ではない。

最近の子どもたちの対人関係については、不登校児の増大、いじめ、校内暴力など、多くの問題が指摘されている。これら問題には、彼らの社会的スキルの欠如や対人関係に関する経験の貧困さが潜んでいるように思わ

れる。これら仲間関係の幼さは、仲間と関わることへの自信のなさによるものではないかと考えられる（小石・勝田・大江・御前・木村，1998）。本研究では、仲間関係という領域に限定した上で、幼児自身が認知している自己効力感と、幼稚園における実際の対人行動を比較し、幼児の自己効力感が一般的か、あるいは領域特的に分化しているのかどうか検討する。また認知された自己効力感が実際の対人行動をどの程度規定しているのかについても合わせて検討する。

II. 方法

1. 被験児

札幌市内K幼稚園に通う年長組の男児15名、女児12名、年中組の9名、女児16名の計52名（年齢4歳～6歳）を対象として、個別面接と自由遊び場面の行動観察を行った。個別面接は夏休み前の7月の1週間、行動観察は夏休み終了後1週間経過した8月末～9月の2週間の間に行われた。

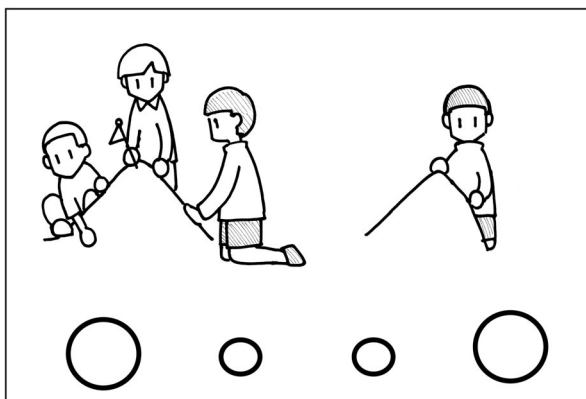
2. 面接調査

刺激材料

桜井・杉原（1985）の社会的受容感尺度の仲間からの受容感7項目の中で、対象幼稚園での子どもらの様子から日常的でない判断

された「なくし物をしたとき、いっしょに捜してくれる友達がいるか。」の項目を削除し、残りの6項目を提示場面として使用した。6場面はそれぞれ、「友達と一緒に遊ぶことができるか」、「友達を自分の家に誘えるか」、「友達と一緒にゲームができるか」、「友達を遊びに誘えるか」、「友達に遊びに誘われるか」、「友達の家遊びにいけるか」という内容である。この6場面から面接時に提示する図版を、男児用と女児用2種類作成した。また、被験児が主人公の立場を理解しやすいように主人公図版を作成した。図版は対象幼稚園に設置された遊具などの具体的状況を配慮して作成された。

各項目の絵は、1枚のカードに2つの絵が描かれ、有能なあるいは受容されている子どもが左側に配置されている。2つの絵のそれぞれの下に大小2つの円が描かれた。この2つの円は、円の上に描かれている行動の程度や頻度を大きさによって表現したものである。被験児は最初に2つの絵のうち一方を選択し、次に選択した絵の下に描かれている大小2つの円のうち一方を選択する。被験児の回答は、このような2回の2件法による4段階評定で、効力感あるいは受容感の高い回答から順に4，3，2，1点と得点化された。図版の例をFigure 1に示す。



（左の絵を指し）こっちの男の子はお友達と遊んでいます。
 （右の絵を指し）こっちの男の子はひとりで遊んでいます。
 どちらがあなたに似ていますか？
 お兄さん（お姉さん）に教えてください。
 「（大きい円を指し）あなたはいつもそうですか？
 それとも（小さい円を指し）ときどきそうですか？」

Figure 1 男児用「友達と一緒に遊ぶことができるか」場面

手続き

面接はK幼稚園の教室において、心理学専攻の男子学生1名、女子学生2名によって個別に行われた。被験児が実験者と向かい合ってから着席してから、実験者は被験児の名前と年齢を尋ねた。実験者は、「これから〇〇ちゃん（被験児の名前）に絵を見てもらいます。お兄さん（お姉さん）はこれから〇〇ちゃん（被験児の名前）に絵の中の男の子（女の子）が何をしているかお話していきます。よく聞いてくださいね。」という教示を与えた。そして主人公図版を被験児の性に合わせて提示し、主人公に被験児と同じ名前をつけた。

まず絵を見せながら絵の状況の説明をした後、「（被験児から見て左の絵を指し）こっちの男の子（女の子）は～。（被験児から見て右の絵を指し）こっちの男の子（女の子）は～。どちらがあなたに似ていますか？お兄さん（お姉さん）に教えてください。」と教示を与え、被験児がどちらかの絵を選択するのを待った。被験児がどちらかの絵を選択したら、その絵の下の方を指して、「（大きい円を指し）あなたはいつもそうですか？それとも（小さい円を指し）ときどきそうですか？」と尋ねた。被験児がどちらかの円を選択したら、実験者はその回答を記録用紙に記入した。被験児に絵を示すときは、必ず被験児から見て左の絵から示すようにし、また絵の選択後、その下にある円を指すときは必ず大きい方の円から示すようにした。なお6場面の提示順序は被験児ごとにランダムに呈示した。

3. 行動観察

各被験児の仲間との相互交渉について、一人につき5分間の観察を3回行った。観察場面は被験児が自由に仲間との相互交渉を行える自由遊び場面とした。観察は屋外（園庭）と屋内（教室、ホール）で行われ、観察場面はVTRに記録された。観察法としては特定の対象を一定時間追跡して観察する個体追跡

サンプリング（focal individual sampling : Martin & Bateson, 1986/1990）を用いた。観察では一人の子どもについて、一回撮影するごとに一日以上の間隔をあけるようにした。その結果、被験児について15秒を1単位とする60単位の資料が得られた。この資料にもとづいて2名の記録者が行動の記録を行った。記録には1-0サンプリング（one-zero sampling : Martin & Bateson, 1986/1990）を用い、各時間単位ごとに、以下に示す行動カテゴリーのひとつひとつについて独立に記録した。記録者間で食い違いが生じた場合は、2者間の協議によって決定した。

記録に用いた行動カテゴリーとその定義は次の通りである

- 1) 「単独行動」：何もせずにぼんやりしている、一人でうろうろ歩き回っている、一人で遊んでいる。
- 2) 「注目行動」：他児の行動を眺めているが、近寄ろうとはしない。
- 3) 「接近行動」：他児の行動に注目し近づいていく、他児の近くにおいて他児の行動に関心を示している。
- 4) 「平行行動」：他児の近くにおいて同じ行動をしているが、両者のコミュニケーションがない。
- 5) 「接触行動」：他児に話しかける、物を渡す、身体接触など新たにコミュニケーションを促す行動とその成功・不成功。
- 6) 「被接触行動」：接触行動を受けることとその受容・非受容。
- 7) 「相互作用」：他児との1往復以上の継続したコミュニケーション（会話、モノのやりとり、身体接触など）。さらに会話、モノのやり取り、身体接触についてはそれぞれ独立に記録した。
- 8) 「対大人行動」：大人（先生、撮影者）に対する行動。
- 9) 「笑いの共有」：お互いに相手を見ながら笑い合う、同じ対象を見て一緒に笑う、一緒

に行動しながら一緒に笑っているなど、肯定的感情の共有。

10)「攻撃行動」: 身体的攻撃(たたく、けるなど)および言語的攻撃(怒る、どなるなど)を敵意の有無にかかわらず、記録した。

1単位(15秒間)の間、対象児が映像から外れている場合、または他児にまぎれて対象児が確認できない場合はOUTとして、その時間は記録しなかった。

なお、行動カテゴリーの分析には、各行動カテゴリーの出現率、接触成功率、被接触受容率の角変換値を用いた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 自己効力感尺度の因子分析

自己効力感の6場面について、主成分分解による因子分析を行った。ガットマンの基準にもとづき、固有値が1以上の2因子を抽出し、主成分分解のバリマックス回転を行った。2因子による分散説明率は55.384%であった。

Table 1に因子分析の結果を示す。

第1因子は項目2の「友達を家に誘うことができる」、項目6の「友達の家に遊びに行くことができる」が含まれているため、家に関連する要因と考えられる。第2因子は項目1の「友達と一緒に遊ぶことができる」、項目3の「友達とゲームを一緒にすることがで

きる」、項目4の「友達を遊びに誘うことができる」、項目5の「友達に遊びに誘われる」が含まれるため、一般的な遊びの関連する要因と考えられる。しかし因子負荷量をみると、項目2と項目3と項目5が2つの因子にやや高い負荷量を示しているため、明確な区別は困難と判断した。これは自己効力感の6場面間の相互関連の仕方に個人差があるためだと考えられる。したがって分析には6場面の合計値を自己効力得点として使用することとした。

自己効力得点について、年齢×性別の2要因分散分析を行ったところ、主効果、交互作用ともに有意な差は見られなかった。

2. 自己効力感と対人行動の関連性

自己効力感得点と各行動指標間の相関係数を求めた。結果をTable 2に示す。被験児数の少なさを考慮して全体、年齢別、性別で算出し、10%水準以下のものについてみていくことにする。

全体では単独行動に負の相関がみられ、接触成功率、相互作用、モノのやり取り、攻撃行動、被攻撃行動に正の相関がみられた。この結果からは自己効力感が高いほど対人行動に積極的であり、良好な仲間関係を築いていると考えられる。

接触成功率すなわち仲間からの対人行動の受容が高い点を考慮すれば、攻撃行動や被攻撃行動は、対人関係に対する自信の表れと考えることができる。それは敵意を含んだ攻撃行動ではなく、攻撃的な行動でコミュニケーションをとる、例えば、挨拶の代わりにたたいて接触する、というような行動も含んでいるものと思われる。

次に年齢別の結果を見ていく。

年長では単独行動、注目行動に負の相関がみられ、接触成功率、相互作用、会話、モノのやり取り、攻撃行動、被攻撃行動に正の相関がみられた。年中では攻撃行動に正の相関

Table 1 自己効力感尺度の因子分析

	FACTOR1	FACTOR2	共通性
場面2	0.870	0.204	0.486
場面6	0.851	-0.156	0.799
場面5	0.217	0.720	0.428
場面1	-0.161	0.678	0.291
場面3	0.354	0.551	0.567
場面4	-0.046	0.537	0.750
固有値	1.684	1.639	3.323
説明率(%)	28.067	27.317	55.384

Table 2 自己効力感得点と対人行動指標の相関

	全 体	年 齢		性 別	
		年 長	年 中	男	女
単 独 行 動	-0.297*	-0.380*	-0.211	-0.350+	-0.251
注 目 行 動	-0.177	-0.355+	0.102	0.027	-0.239
接 近 行 動	0.070	0.091	0.061	0.057	0.107
平 行 行 動	-0.009	0.074	-0.070	0.076	-0.075
接 触 行 動	0.139	0.282	-0.032	0.214	0.057
被 接 触 行 動	0.036	0.248	-0.178	0.029	-0.054
接 触 成 功 率	0.249+	0.363+	0.087	0.199	0.392*
被接触行動受容率	-0.155	-0.19	-0.153	0.025	-0.256
相 互 作 用	0.298*	0.3800+	0.228	0.239	0.335+
会 話	0.189	0.339+	-0.005	0.124	0.242
身 体 接 触	0.174	0.242	0.108	0.225	0.139
モノのやり取り	0.261+	0.364+	0.064	0.268	0.167
対 大 人 行 動	0.043	-0.075	0.163	-0.081	0.147
カ メ ラ 行 動	-0.045	0.190	-0.421*	-0.219	0.116
笑 い の 共 有	0.214	0.279	0.103	0.180	0.364+
攻 撃 行 動	0.326*	0.33 +	0.353+	0.398+	0.106
被 攻 撃 行 動	0.284*	0.401*	0.096	0.095	0.409*

+p<.10 *p<.05 **p<.01 F32 ***p<.001

がみられた。このように年長児では全体の結果とほぼ同様の結果が見られた。一方、年中児では攻撃行動との関連以外、他の対人行動との関連は見られなかった。

攻撃行動に関しては、年長では被攻撃行動とも相関がみられるのに対し、年中児ではそのような相関はみられない。VTRに記録された具体的行動を見直してみると、年長ではやられたらやり返す（言われたら言い返す）というような攻撃行動の応酬がみられ、また笑顔などのポジティブな感情表出が伴っている場合が多い。すなわち攻撃行動の応酬が積極的な対人コミュニケーションの一つのパターンとなっている状況が見受けられる。これに対し、年中児では一方向的な攻撃が多く見られ、積極的なコミュニケーション行動としての攻撃行動とは言い難い。

次に男女別の結果を見ていく。

男児では単独行動に負の相関がみられ、攻撃行動に正の相関がみられた。女兒では接触成功率、相互作用、笑いの共有、被攻撃行動において正の相関がみられた。これらと比較してみると、男児よりも女兒の方が自己効力感の高さが相互作用の多さに関連しているこ

とがわかる。男児では自己効力感が低いことによる単独行動の多さ、つまり対人行動における消極性との関連はみられるが、自己効力感の高さと相互作用の多さ、つまり対人行動における積極性の関連はみられなかった。それに対し女兒では、自己効力感の高さにより、接触成功率、相互作用、笑いの共有の多さなど、受容的で良好な対人関係の促進と関連があることがわかった。

3. 自己効力感の個人差

クラスター分析

因子分析の結果から、自己効力感6場面の相互関連性には大きな個人差があると予想される。そこで次に、自己効力感の個人差に関する分析を行った。

6つの場面毎の得点を用いて、クラスター分析による被験児の分類を行った。まず6つの得点から被験児間のユークリッド距離を算出し非類似度行列を作成した。これを入力データとしてWard法による階層的クラスター分析を行った。得られたデンドログラムにもとづき、被験児を5つのクラスターに分類した。5つのクラスター毎に6場面の平均値を算出

し、クラスター間で1要因分散分析を行った。その結果、6場面のすべてにおいて有意差が見られた（場面1： $F(4,47)=25.17, p<.001$ 、場面2： $F(4,47)=25.93, p<.001$ 、場面3： $F(4,47)=12.66, p<.001$ 、場面4： $F(4,47)=7.31, p<.001$ 、場面5： $F(4,47)=3.66, p<.05$ 、場面6： $F(4,47)=5.72, p<.001$ ）。各クラスター毎の6場面の平均値をFigure 2に示す。この結果にもとづき、各クラスターの特徴をみていくことにする。

第1クラスターはすべての場面において得点が高い、“自己効力感の高い”群である。

第2クラスターは場面1「友達と一緒に遊ぶことができる」と場面6「友達の家に遊びに行くことができる」の2つの得点が高く、場面4「友達を遊びに誘うことができる」と場面5「友達に遊びに誘われる」の2つの得点が高い。したがって、“誘う-誘われるに関する自己効力感の低い”群であると考えられる。

第3クラスターは場面4「友達を遊びに誘うことができる」と場面6「友達の家に遊びに行くことができる」の2つの得点が高く、場面1「友達と一緒に遊ぶことができる」、

場面2「友達を家に誘うことができる」、場面5「友達に遊びに誘われる」の得点が高い。特に場面1について自己効力感が低い。したがって“自分からの積極的アプローチに関する自己効力感の高く、友達からアプローチを受けることに関して自己効力感の低い”群であると考えられる。

第4クラスターは場面2「友達を家に誘うことができる」と場面6「友達の家に遊びに行くことができる」、場面5「友達に遊びに誘われる」の得点が高く、場面1「友達と一緒に遊ぶことができる」、場面3「友達とゲームを一緒にすることができる」、場面4「友達を遊びに誘うことができる」の2つの得点が高い。したがって“家に関する自己効力感が高い”群であると考えられる。

第5クラスターは場面1「友達と一緒に遊ぶことができる」、場面4「友達を遊びに誘うことができる」、場面5の「友達に遊びに誘われる」の得点が高く、場面2「友達を家に誘うことができる」、場面3「友達とゲームを一緒にすることができる」、場面6「友達の家に遊びに行くことができる」といった家に関連する得点が高い。つまり、“幼稚園

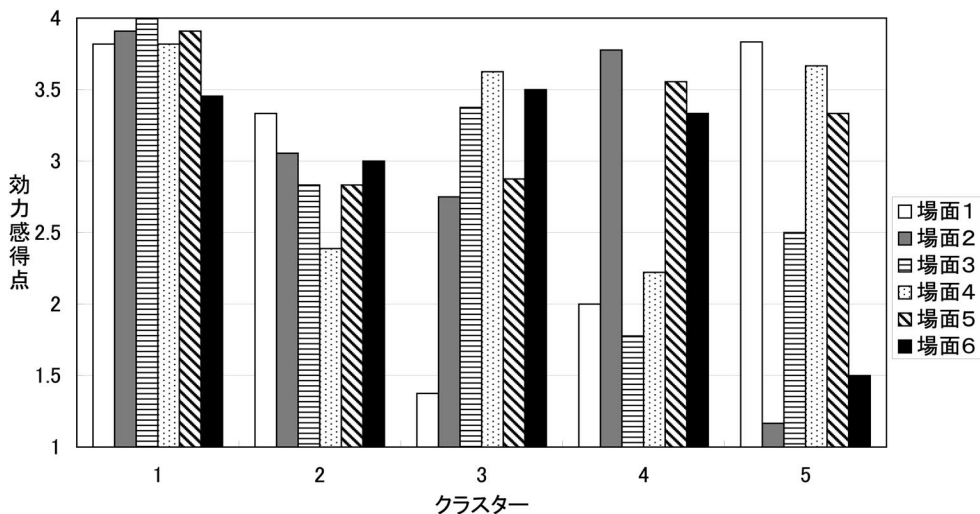


Figure 2 各クラスターの自己効力感得点

内での行動に関しては自己効力感が高く、幼稚園外での行動に関しては自己効力感が低い”群であると考えられる。

6場面合計の自己効力感得点をみると、第1クラスターの得点のみが有意に高く、他のクラスター間では差はみられない。

自己効力感の合計値に差がないということとは、単純に自己効力感が高いか低いかということではなく、その自己効力感の内容に違いがあり、個人差が大きいと考えられる。その個人差の内容は、幼稚園の中での行動なのか幼稚園の外（主に家）での行動なのか、また友達を遊びなどに誘うか友達から誘われるか、の違いが考えられる。

デンドログラムからは、第2クラスターと第4クラスターに類似関係があり、さらにそれらと、第3クラスターに類似関係があり、第1クラスターと第5クラスターは独立していると考えられる。さらに、内容的な観点からみると第2クラスターと第3クラスターは得点が類似しており、第4クラスターと第5クラスターは逆の得点関係にあるといえるだろう。

クラスター間での対人行動の比較

各行動指標についてクラスター間で1要因分散分析を行った。その結果をTable 3に示す。その結果、単独行動 ($F(4,46)=3.75, p<.05$)、モノのやり取り ($F(4,46)=3.18, p<.05$)、攻撃行動 ($F(4,46)=3.53, p<.05$) で有意差がみられた。また平行行動 ($F(4,46)=2.08, p<0.1$)、被攻撃行動 ($F(4,46)=2.21, p<0.1$) で有意傾向がみられた。この結果にもとづき、各クラスターの特徴をみていくことにする。

第1クラスターはモノのやりとり、攻撃行動、被攻撃行動の得点が高く、単独行動の得点が高い。また有意ではないが接触成功率、相互作用、会話、笑いの共有が高く、注目行動が低い。このクラスターは、すべての場面において“自己効力感の高い”群であるが、それに伴って行動面でも相互作用が多く他児

とのコミュニケーションがさかんである。また攻撃行動、被攻撃行動が多いことも特徴的である。これはアグレッシブで自信に満ちた行動の表れだと考えられる。

第2クラスターは単独行動、注目行動の得点が高く、攻撃行動の得点は低い。このクラスターは“誘う－誘われるに関する自己効力感の低い”群であるが、行動面では接触行動、被接触行動をみてみると有意差こそないものの、両方の得点は他のクラスターに比べて最も低い。また友達と一緒に遊ぶことができるという自己効力感が高いにも関わらず、単独行動、注目行動が多く、相互作用も少ないことから、他児とのコミュニケーションの少なさがうかがえる。このように自己効力感と行動の不一致が見られる。単に友達の近くにいることや友達を注目することによって、それを自己の効力感としてとらえているのかもしれない。また単独行動は多いが、接触行動の受容率も他のクラスターと比較すると高い傾向がみられる。これは他児の働きかけに敏感かつ受容的であり、働きかけがあるということによって、友達と一緒に遊ぶことができるという効力感を高められていると考えられる。

第3クラスターは平行行動の得点が高く、単独行動、注目行動の得点は最も低い。このクラスターは、“自分からの積極的アプローチに関する自己効力感が高く、友達からアプローチを受けることに関して自己効力感の低い”群であり、行動面でも有意差はみられないものの接触行動は最も多い。接触行動の多さに比べ、成功率が高くないことから、接触行動に失敗してもまたやり続けるといったこと行動も考えられる。そして、接触行動の多さが相互作用の多さにつながっているのではないだろうか。自ら積極的アプローチすることに関しては、自己効力感と行動の一致がみられる。このクラスターは、友達からアプローチを受けることに関して自己効力感の低い群である。しかし被接触行動は他のク

ラスターに比べてやや高く、他児とのコミュニケーションは多いはずである。このように行動面では、第1クラスターと同じような結果であるが、自己効力感には違いがある。第1クラスターと異なり、自分の行動に対して、他児からの自分に対する行動の自己効力感が低いのは、自分の行動は肯定的に、他児の行動は否定的にみていると考えられる。あるいは特定のグループでのみ行動しているケースが多く、グループ内でのやり取りは特別意識されない、または気づいていない可能性もある。

第4クラスターの相互作用は多くもなく少なくもないといえるだろう。一方で、平行行動の得点は高く、攻撃行動、被攻撃行動の得点は最も低い。このクラスターは“家に関する自己効力感が高く、友達と一緒に遊ぶ事に関して自己効力感の低い”群であり、友達と一緒にワーツと遊ぶというよりも、友達について回るといふ行動が多いのではないかと考えられる。家に関する自己効力感が高いというのは、家での遊びと幼稚園内での遊びの違いに起因するものではないかと考えられる。性格的に内弁慶で家の中ではよく行動できるが、幼稚園では引っ込み思案という傾向も考えられる。

第5クラスターは平行行動の得点が最も低く、単独行動、注目行動の得点が高い。このクラスターは、“幼稚園内での行動に関しては自己効力感が高く、幼稚園外での行動に関しては自己効力感が低い”群である。しかし、実際には他児とのコミュニケーションは少なく、行動との不一致がみられる。したがって対人行動に関しての自信は持っているが、行動に表れていないと考えられる。あるいは自己効力感よりもこうしたいという願望の表れなのかもしれない。しかしながら接触受容率をみると他のクラスターに比べ最も高いことから、相互作用を開始するスキルが欠如している、あるいは場面に応じた使い分けができ

ないために、受動的な相互作用に限定され、相互作用が少ないという可能性も考えられる。行動面では第2クラスターとの類似がみられる。

IV. 総合考察

1. 自己効力感尺度の検討

自己効力感6場面の合計得点に関しては、年齢や性別による差はみられなかった。因子分析の結果からは、明確ではないが家要因と遊び要因という2つの要因に分けることができた。しかし因子構造は不明確であり、場面間の関連の仕方に個人差があると考えられる。仲間関係には、幼稚園の内外での人との関わり方の違いや、友達を誘うー誘われるというような仲間関係を形作るさまざまな側面が存在している。そのため自己効力感は、仲間関係という領域の中であっても単一次元で捉えることは出来ず、さまざまな課題領域別に階層化されているのではないかと考えられる。

2. 自己効力感と対人行動の関連性

一般的に自己効力感の高い子どもは、自分がある行動に対して「できる」と認知して行動することにより、実際の場面で自己のスキルをうまく運用することができているのではないかと考えられる。一般に受容的でコミュニケーションが多く、良好な対人関係を築く一因となっているが、一方で攻撃的な行動との関連もみられる。そして、自己効力感の低さと単独行動の多さに関連があるということは、対人的な自信のなさが仲間に加われないという実際の行動にも影響していると考えられる。自己効力感が低いことは、社会的スキルが未熟であることを示している可能性もあるが、自分がある行動に対して「できない」という認知を持つことにより、スキルの運用がうまくできていないということも考えられる。

年長児では他者の行動に対して適切に反応

するというスキルが発達しているのに対し、年中児では他者の行動とは関係なく自分の思うままに行動するというスキルの未熟さが考えられる。そしてここでも、両者に攻撃行動と自己効力感の高さとの関連がみられることから、攻撃行動は乱暴なコミュニケーションの取り方というだけでなく、対人行動に対する自信の表れと言えるのではないだろうか。

年長児で自己効力感を実際に対人関係に対して、行動を規定する要因となっているといえる。しかし年中児では自己効力感はほとんど行動を規定する要因とはなっていない。年長児では過去の対人経験における成功体験や失敗体験によって、認知された自己効力感と行動の一致度が高まったのであろう。桜井・杉原(1985)は幼児の自己効力感について、幼児は比較的肯定的な自己評価をする傾向があり、また他者との比較能力が発達していない、という点を指摘している。年長児よりも対人経験が少ないと思われる年中児では、認知された自己効力感を実際の行動を正確には反映していないと言えらる。

しかし自己効力感自体に年齢差は見られなかった。実際の行動との対応が不明確な年中時点において、どのようにして自己効力感が形成されたのかは明らかではない。

3. 自己効力感の個人差と対人行動

すべての場面において自己効力感の高い第1クラスターの子どもは、良好な対人関係やアグレッシブな行動がみられ、自分の思ったとおりの行動がとれていると考えられる。自己効力感が実際の行動に影響しているといえるだろう。

第2および第3クラスターの比較から、「誘う-誘われる」に関する自己効力感の低い子どもは受容的で自分は友達と一緒に遊ぶことができるという意識は持っているが、自分から積極的に友達を誘うことが苦手で、そのため他児とのコミュニケーションは少なく

なりがちであった。実際にはやりたいことが、スキルの低さによる苦手意識、または失敗体験などからその行動が抑制されているという可能性がある。このような特徴の子どもは遊びに関する関心は高いが、対人行動に關しての能動的な関心は薄いのかかもしれない。自分からの積極的アプローチに関する自己効力感が高く、友達からアプローチを受けることに関して自己効力感の低い子どもは、行動面では最も友達といることが多く、相互作用も多かった。自分の行動に対する効力感の高さから、対人関係においても良好でコミュニケーションは多いと考えられる。自分の行動に対する効力感の高さ故に、他人の行動に対しては低く評価してしまっているのかもしれない。もしくは、特定のグループでいつも行動しており、自分が他児から接触を受けていることに気づいていない可能性もある。

第4および第5クラスターの比較から、家に関する自己効力感が高く、友達と一緒に遊ぶことに関して自己効力感の低い子どもは、実際の他児とのコミュニケーションに関する行動は多くも少なくもなかった。友達と積極的に遊ぶ訳ではないが、一緒にいてついて回っているという行動が考えられ、攻撃や被攻撃も少ないことから、引っ込み思案な行動傾向がうかがえる。家に関する自己効力感の高さは、家では内弁慶で幼稚園では引っ込み思案という可能性もあるかもしれない。また、家での遊びと幼稚園での遊びは質的に異なるということも考えられる。幼稚園内での行動に関しては自己効力感が高く、幼稚園外での行動に関して自己効力感の低い子どもは、実際の行動では、他児とのコミュニケーションは少なく、ひとり遊びが多かった。したがって、実際の対人関係におけるスキルは高くないと考えられる。対人行動に関する自信は持っているが、実際には行動に表れていない。これは自分に対し肯定的評価をしている、もしくは自分の願望の表れである可能性が考えられ

る。また、上述のように家要因は環境にも配慮した高度なスキルが必要だと考えられる、あるいは実際の環境の要因も大きいため自己効力感が低くなった可能性も考えられる。

4. まとめと展望

自己効力感に関して、本研究では Bandura (1977) の提唱した自己効力感の一般性よりも、むしろ特定の課題と結びつく課題特殊的な自己効力感という考え方が有効であることが示唆された。幼児の認知している自己効力感は、その領域や課題内容に応じた階層構造を有している。自己効力感の構造の個人差によって、関連する行動の種類が異なると考えられる。

自己効力感と対人行動の関連において、年長児で自己効力感と行動との関連性がみられ、年中児で自己効力感と行動の関連性が乏しいという年齢差がみられた。それに対し自己効力感の形成において年齢差はみられなかった。実際の行動との対応がない段階で、どのようにして自己効力感が形成されたかについて、それまでの対人的な経験による差なのかどうかは明確ではない。したがって、これについてはさらに縦断的に検討する必要があるだろう。

[参考文献]

Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, 84, 191-215.

小石寛文・勝田くみ子・大江祥・御前礼子・木村清弘 1998 仲間関係への自己効力感を高める操作の効果の検討 神戸大学発達科学部研究紀要, 6(1)

近藤文良・石井久美子 1997 自己効力の一般性と課題特殊性 滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学, No.47, 9-21.

桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度 (日本語版) の作成 教育心理学研究, 31,

245-249.

桜井茂男・杉原一昭 1985 幼児の有能感と社会的受容感の測定 教育心理学研究, 33, 237-242.

柴田利男 1993社会的コンピテンスの諸測定度の相互関連性とその個人差 発達心理学研究, 4, 60-68.

柴田利男 1996 対人関係能力 内山伊知朗 (編) K・P・Sシリーズ7 社会心理学 健帛社 Pp.59-80.

柴田利男 1998 幼児の社会的コンピテンスに関連する社会的認知の要因 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 第35号, 19-39.

Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.

Harter, S. & Pike, R. 1984 The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*, 55, 1969-1982.

竹綱誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之 1988 自己効力に関する研究の動向と問題 教育心理学研究, 36, 2, 77-89.

Dodge, K. A. 1980 Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, 51, 162-170.

Dodge, K. A., McClaskey, C. L. & Feldman, E. 1985 Situational approach to the assessment of social competence in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 344-353.

Dodge, K. A., Pettit, G. S., McClaskey, C. L. & Brown, M. M. 1986 Social competence in children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 51 (Serial No.213)

Martin, P. & Bateson, P. 1990 行動研究入門 : 動物行動の観察から解析まで (粕谷英一・近雅博・細馬弘通訳) 東京・東海大学出版会 (Martin, P. & Bateson, P. 1986 *Measuring behavior: An introductory guide*. New York・Cambridge University Press.)

本研究の一部は、日本心理学会第68回大会において報告されました。

本研究の実施にあたり、北星学園大学2002年度卒業生 青木康輔さんの協力を得ました。ここに記して謝意を表します。

また調査にご協力いただいた、大藤学園 北野しらかば幼稚園の大谷和彦園長先生、担当の先生方、園児の皆さんに心より感謝申し上げます。

[Abstract]

Self-efficacy and Competent Interpersonal Behavior in Preschool Children

Toshio SHIBATA

This study investigated relationships between self-efficacy and various interpersonal behaviors in preschoolers' peer relations. Fifty-two young children were interviewed to reveal their self-efficacy (confidence and perceived acceptance) in interpersonal situations, in addition, they were being observed for their interpersonal behaviors in free play situations. The following results were obtained. First, the results suggest that the strength of self-efficacy may vary across interpersonal task domains (e.g. initiating relations, accepting others, and so on). Secondly, age difference was not significant for the sum total of self-efficacy. Finally, in 5-6 year-old children, self-efficacy was related to interactive and aggressive behaviors, whereas, in 4-5 year-old children, self-efficacy was not related to interpersonal behaviors. These results suggest that development of self-efficacy is not related to effective interpersonal behaviors.

